

第2章 乳児期における『気になるこども』に関する 気づきの観察事項（チェックリスト）の活用について

◇ 保育士の気づき

赤い色のブロックや積み木ばかり集めて持ち歩いている、一人遊びが多く他のこどもの遊びに興味がない、友だちが歌う声や体操の曲を嫌がって耳をふさぐ、回るものや光るものを好んで見る（見え方を楽しむ）、抱っこしても身体が添わない、などの姿に出会うことはありませんか。広汎性発達障害については、3歳児以降に確定診断がつくことが多いのですが、その特徴は乳児期に気づくことも多くあります。乳児期から保育所で過ごすこどもの気になる姿に対して職員で共通理解を図り、予防的な取組みを進めるため【乳児期における『気になるこども』に関する気づきの観察事項（チェックリスト）】を参考に、注意深く見守りましょう。

◇ 予防的取組みと大切にしたいこと

チェックリストをつけることで見えてきたこどもの姿に目を向け、この時期に予防的な支援をすることが大切です。

遊びに集中しにくいこどもであれば落ちつく環境を用意し、積み木遊びで積み木を高く積んでいくことにじっくりと関わったり、指さしに応じながら1対1で絵本の読み聞かせを行い、語彙を豊かに語りかけたり、ままごと遊びで行動や物と言葉を一致させるやりとりをするなど、保育士が意識的に関わりを持ちます。毎日少しずつでも、このような遊びで個別に継続的に関わることで、抑制する力が育ち集中できるようになります。

この意識的な関わりを担任同士で共有し継続させること、それが乳児期におけるこどもへの援助なのです。複数で関わることの多い乳児クラスでは、特に保育士集団の共通理解と共通した援助が大切です。

乳児期の支援の土台は、保育士との安定した人間関係であり、困った時や不安な時には特に同じ保育士が同じように対応することで、大人への信頼関係が育ちます。この時期の一人一人への丁寧な関わりが土台となり、スムーズに幼児期の生活に移行していきます。乳児期のあいだに予防的な取組みを行うことが『支援の始まり』です。